

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん対談企画

天竜川漁協組合長
伊藤伸一さんと語る

諏訪湖から流れ出る天竜川と、南アルプスを源流とする三峰川や中央アルプスからの多くの河川。上伊那地域の天竜川本支流を管轄する天竜川漁業協同組合(伊那市)の伊藤伸一組合長(55)は「地域の財産としての河川を少しでも良い形で後世に引き継ぎたい」との思いを役職員とともに大事にしながら、人間と生き物との共存共栄の関係を目指し、さまざまな課題と向き合っている。

課題の一つに川の水を活用した水力発電と生き物との関係がある。水力発電は二酸化炭素を排出しないクリーンな国産エネルギーだが、河川からの取水による減水は、生き物の生育環境に影響を及ぼす。川の水を減らさずに行う水力発電として、既設の砂防えん堤の直下に発電設備を設ける「直下型」の小水力発電を要望する。

天竜川の生き物のうち、大型のアマゴ「天

竜差し」は支流から本流に下って育ち、支流に遡上する魚で、釣り人に人気。もう一つはザザムシで、食文化は地域に根付き、高級珍味としても知られている。さらにイワナ、アユ、コイなど多様な生き物は天竜川からいたたく自然の恵みだ。一方で近

年は魚食性の鳥カワウによる食害が深刻化しており、伊藤組合長は「被害拡大を食い止めるにも漁協が単体でできる対策では限界がある」と語る。在来魚を捕食する外来魚や外来植物の拡大も悩みの種だ。



天竜川の生き物の生息環境を守り、恵みに感謝する伊藤伸一組合長。釣りの経験も豊富。大物が掛かり、巧みに竿を操る18日、伊那市の天竜川

天竜川の子どもたちへの環境教育にも取り組む同漁協。魚の受精卵の中に眼が確認できるまで成長させた「発眼卵」の飼育を地元の小学生に体験してもらう「命の学び」が広がっている。飼育と放流を通じて命の尊さを知った子どもたちが古里の川と川に生きる生き物に思いを寄せ、その思いを次の世代につないでいく。伊藤組合長の願いが込められた特色ある取り組みが展開されている。

(野村知秀)

つないでいく天竜川への思い

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん

対談

伊藤伸一さん



小林光さん 74

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー(環境分野)

小水力発電に知恵を

小林 川には発電、漁業、釣り、観光など様々な活用方法があります。上伊那地域の天竜川ではどのような活用のされ方が多いのでしょうか。

伊藤 釣りなどのレジャー、そして水力発電ですね。

小林 温暖化への対策として水力発電が見直されていますね。ただ、水力発電によって河川の水が減ることもあります。どう考えますか。

伊藤 ゼロカーボンに向けた取り組みの一環で小水力発電に川の水を利用したいという話をいただきますが、発電のために取水すれば、河川の水は少なくなり、生物に影響が出ます。電力会社側から漁業補償という名目で金額を提示されますが、地球環境を守るために自然を壊してまでやるべき政策なのか疑問に感じます。今の時代、自然への影響をお金で解決するのではなく、川の水を減らさずに行う水力発電を目指すべきだと思います。

伊藤 小水力発電は全機直下型です。それが私たちの要望です。

小林 発電効率という視点で見れば、長い水路で落差を増やす方が直下型より発電効率が良いですから、事業者は効率を求めたくなるでしょうね。両者がどう歩み寄る

かということになります。知恵が必要ですね。では、次に天竜川の生き物に目を向けていきます。天竜川を象徴する生物といえば何ですか。

伊藤 天竜川の支流で生まれ、本流に下って育ち、支流に遡上する大型アマゴ「天竜差し」は象徴する魚の一つです。本流には餌となるザザムシ(クロカワムシ)がたくさん生息しています。上流の諏訪湖は冬でも水温を安定させることに役立ちます。その結果、天竜川のアマゴは大きく育ちます。ザザムシも象徴する生き物です。昔は流域に住む住民のたんばく源でしたが、今は伝統漁法としての文化や高級珍味としての側面が強いですね。

単漁協では限界が

小林 川にはほかに魅力がありそうです。

伊藤 例えば、宮田村の天竜川沿いや支流の大田切川などでは、環境省のレッドリストで、野生での絶滅の危険性が高いとされる「絶滅危惧ⅠB」のチョウ、ミヤマシジミが生息しています。全国一の繁殖地とも聞いています。

象徴する生き物「天竜差し」とザザムシ



天竜川や支流の環境について語り合う小林さんと伊藤組合長＝6月24日、伊那市の小黒川

子どもの心に残る

小林 地元の小学生向けの環境教育にも力を入れているそうですね。

伊藤 魚の受精卵の中に眼が見える「発眼卵」の一部を提供し、小学校で飼育機会をつくっています。子どもたちには、卒業やクラス替えが行われる前の3月ごろまで育ててもらい、みんなで放流します。発眼卵は9割以上がふ化しますが、川に放流する頃、稚魚は数十匹程度にまで減ってしまう場合がほとんどです。放流後、産卵できる親魚になるまで生き残れる個体数はさらに減ります。発眼卵を飼育経験を通じ、命とは何か、命と命のつながりや自然とのかかわりについて学び、何かを感じ取ってもらえればと思います。

伊藤 2021年に駒ヶ根市内



発眼卵から育てたアマゴを放流する駒ヶ根市赤穂小学校の児童＝2023年3月、駒ヶ根市の風川

発眼卵の飼育、放流体験で児童に命を学ぶ場提供

伊藤 半分以上は漁協が負担していますが、単漁協ができる対策には限界があります。県が主体となつて有害鳥獣対策を行い、県内各漁協が協力する体制に変える必要があります。

共存共栄の関係に

小林 温暖化の影響をどうとらえていますか。渇水や洪水についてはいかがですか。

伊藤 線状降水帯やゲリラ豪雨は河川環境の悪化を招きます。川だけでなく、上流の山が崩れ、土砂が流れ出る影響がとても大きいです。災害後は復旧工事が続きますよね。魚が遡上し、産卵する時期の工事はやめてほしいのですが、災害復旧のためといわれると、それほど強くも反対できません。施工業者や国、県との協議を綿密に行い、影響ができるだけ少ない工事となるように話し合います。災害が増えると、こうした協議は必然的に増えます。

小林 漁協の皆さんの苦労は大きいのだと思います。それでも皆さんが時間と努力をかけて天竜川を守ろうとしています。そのモチベーションの源は何ですか。

伊藤 天竜川への愛着、そして、地域の財産としての河川を少しでも良い形で後世に引き継ぎたいという思いからです。

小林 伊藤さんにとって天竜川の理想の姿とはどのような姿でしょうか。

伊藤 多種多様に生息する生き物と少しでも良い形で共存共栄できる関係ですね。外来種、カワウ、気候変動、それにより増加する河川工事、水力発電建設などさまざまな課題があります。それでも川を思う人としてより良い道を模索しながら役職員一同、業務に当たっています。

伊藤 発眼卵飼育体験を通じ、地元の河川について学び、触れ合う経験を子どもたちに残してあげたいと思うからです。飼育体験の思い出は何らかの形で子どもたちの心の中に残るはずです。その思い出とともに大きくなり、地元の河川を大切に思う人へと成長していく。そして、川への思いを子や孫につないでいく。そうなつてくれたら良いと期待しています。